

二重

デュエット

Duet ebisawa yasuhisa

唱



海老沢泰久



文春文庫

二重唱 〈デュエット〉

定価はカバーに
表示してあります

1997年11月10日 第1刷

著 者 ^{え び さわ や す ひ さ} 海老沢泰久

発行者 新 井 信

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-741410-4

文 春 文 庫

江苏工业学院图书馆

二 藏 唱 书 デ ュ 章 ッ ト >

海 老 沢 泰 久



二重唱
ヘデュエット
目次

ひと月 9

夢の部屋 33

昔いた場所 57

友だちの恋人 79

デュエット
二重唱 103

朝の笑い 127

出口
151

うそ替え
175

夜のタクシー
197

ウサギ
219

傷
243

輪^カ唱^ノ曲^ン
265

解説 山本容朗
289

二重唱

△デュエット▽

ひと月

山田宏一は夢から覚めたとき、夢の中身にちよつと決まりのわるい思いをした。

彼は夢の中で若い女と一緒にいた。彼女は白いブラウスにタイトスカートといった格好で、すらりと伸びた脚にはいい形をしたハイヒールをはいていた。そしてつぎの瞬間には二人はベッドにはいつており、そこで彼はスカートやハイヒールを脱いだ彼女を抱いたのだった。顔も名前も知らない女だったが、肌がすべすべしていてとても気持がよかった。

山田宏一はハツと思つてパンツに触つてみた。安心した。何もへんなものはついていなかった。それから彼は中井優子に会わなければならないと思つた。いまの夢はそれに対する暗示だったのだ。彼女とはもう三週間以上も会っていないなかつた。彼はいつものことながら胸がときめいた。そして、彼女に会おうと思ふといつもこんなふうになるのに、どうして三週間も放っておいたのか不思議だと思つた。ともかく、きょうはどうしても

会わなければならぬ。

彼は勤め先の大学へ行くために、八時にアパートを出て電車に乗った。電車の中には若い女がたくさん乗っており、彼のすぐ目の前にもかわいい子が立っていた。電車が揺れるたびに腿ももが彼女の体の一部に触れた。彼は官能的な気分を呼び覚まされ、それを楽しんでゐるうちに、ふと朝の夢に出てきた女が着ていた服のことを思いだした。あれはだいぶ前に中井優子が着てきたものとそっくり同じだったのである。

そのときも山田宏一は彼女に二週間か三週間ぶりに電話をしたのだった。そして、約束の時間と場所を決めたあとで、彼は彼女にいった。

「きょうはどんな服を着ているんだい？」

「どんなのだと思う？」

「そうだな。まず上は白いブラウス。下はタイトスカートで、靴はぐつとくるようなハイヒールってとこかな」

すると電話の向うで彼女はクスクス笑いだした。

「何がおかしいんだい？」

と彼はきいた。

「そんな決まりきった格好をしている女がいまどきいるわけがないじゃない。わたしがはいているのはジーンズよ」

「そうだろうな」

と彼はむぞうきにいった。がっかりしていると思われるのがいやだったのだ。

「じゃあ、あとで」

そういつてから彼女はちよつと待ってといい、こうつけ加えた。「遅れても必ず行くから待っててね。いそがしいのよ、きょうは」

彼がその夜、約束の場所で待っていると、彼女は一時間遅れてやってきた。しかし彼は非難めいたことは何も口にしなかった。彼女はジーンズ姿ではなく、彼が期待したとおりの服装であらわれたのである。

「これでいいかしら」

と彼女は彼にほほえみかけた。「それでも大急ぎでアパートに帰って着替えてきたのよ」

中井優子はそういう女だった。それに彼女は何週間放っておいてもけっして怒ったりしなかったし、電話をすればいつでも必ず会ってくれた。彼女はすばらしい女だった。

山田宏一は電車から降りると、大学行きのバスに乗るためにバス・ターミナルのほうへ歩いて行った。そこで大学の助手仲間の一人とばったり出くわした。

「帰りに一杯やらないか」

と彼がいった。

「わるいな」

と山田宏一はいった。「きょうは駄目なんだ」

バスがきたので彼らは乗りこんだ。山田宏一が黙っていると、助手仲間の男が怪訝そうに顔を覗きこんで、いった。

「何かあったのか？」

「いや。どうして？」

と山田宏一は訊ねた。

「何だか入試前の受験生みたいな顔をしてるからさ」

山田宏一は首を振って苦笑いをした。三週間も会わなかったからだと思った。本当にどうして三週間も放っておいたのだろう。かけようと思えばいつだって電話をかけられたのだ。そうすれば彼女はちゃんと会ってくれ、自分のなかの潜在意識によって今朝のようなメッセージが伝えられることもなかっただろう。彼はバスに揺られながら、中井優子の息づかいや手のひらのやわらかさ、それから腰の感じ、足の指の形といったものをつぎつぎに思いだした。

大学の神道史の研究室にはいると、彼はお昼までかけて、教授の学界雑誌用の論文を校正した。中井優子は婦人雑誌の編集者で、普通の勤め人のような規則正しい生活をしていなかったたので、電話はいつも午後にすることにしていたのである。教授の論文は、

明治政府の命令で廃仏毀釈はいぶつきしやくがおこなわれ、やがて神道が神道そのものから外れて国家神道になってゆく過程を論じた面白いものだったが、あまり身がはいらなかった。

ようやくお昼が過ぎたので彼女の会社のダイヤルを回した。編集部への女の子が出たので、彼女の名前をいって替わってくれように頼んだ。女の子が彼女の名前を呼び、彼女がそれに応える声が電話の向うからかすかに伝わってきた。彼はその声をきいただけで、喉のあたりに何やら妙なものがこみあげてくるのを覚えた。

「もしもし」

と彼女はいった。彼は喉がカラカラに渴いて声がうまく出せなかったもので、一度唾をのんでからいった。

「やあ」

「どなたですか？」

「ぼくだよ」

一瞬の間があったが、彼女は分って、親しみのこもった声でいった。

「ごめんなさい。あなたはいつも忘れたところに電話をしてくるから」

「三週間ぶりかな」

「ちがうわ。四週間と三日よ」

と彼女はいった。しかし声には非難の調子はぜんぜん混じっていないかった。

「元気かい？」

と彼はいった。

「元気よ。あなたは？」

「まあ、何とかやってるよ」

「じゃあ、よかったわ」

山田宏一は受話器を握りしめ、ありきたりの挨拶はこれくらいでいいだろうと思ったが、つぎの言葉がなかなかうまく出てこなかった。もう何度も会って親しくしている女に今夜会おうというだけのことなのに、それがいいだせないのだ。いつもこうなのだった。本当に入試を前にした初心^{うぶ}な受験生みたいだなと思った。どうしてこんな簡単な問題に慣れることができないのだろう。しかし彼女と今夜会うためには何かいわなければならなかった。彼は勇気を出してやっといった。

「久しぶりに今夜会おうか」

一息ついてこれでもうだいじょうぶだと思ったとき、電話の向うで彼女が考えこむのが分った。

「都合がわるいのかい？」

と彼はいった。

「そうなの。七時に人と会わなきゃいけないの」